によって，男性も女性も外圧が低下することであろう。50代，60代以降の人生のゆとりは，外圧の低下から生み出されているのである。外圧が下がりゆとりがあるだけ，内圧で生きることが可能になり，この意味では，独自な人生が形づくられる可能性は高い。生涯学習論からすれば，実存的存在期は内圧を促しながら個性的な人生を形づくる時であり，それを援助する生涯教育プログラムがいろいろな地域で策定されているのである。

しかし，落し穴もないではない。最大の問題は，外圧の低下が内圧の増大によって補完されるか否かということである。内圧が増加して，人間の行動のもう一つの源泉である外圧の低下を補わなかったら，間違いなく，われわれの活動レベルは低下をきたすのではないだろうか。内圧の増大とはこと意欲に関するだけに，非常にむずかしい問題に結びついているのである。

関連する問題を付け加えると，外圧の低下は，個人差の拡大をもたらす，ということであろう。すなわち，自身の力で内圧を高めることのできる人は，ゆとりを活用して，豊かな人生を積極的に開拓していくのに対して，外圧の低下に比例して内圧も低下する人々は，活動レベルが下がって無気力な日々をおくることになるのである。生涯発達の過程における個人差の拡大は，第三の実存的存在期の大きな問題なのである。

V．終わりに

過去の学問的研究や専門の文献にこだわることなく，かつ細かい問題はさし置いて，一つの生涯発達論を概説した。こうした見方が，既に言い古るされたものなのか，あまり一般的でないものなのか，少しは個性的な見方があるのかどうかは分からない。生涯発達の現在の関心を率直に書き著したらこのようになった次第である。

筆者の見方はこうである。今や生涯教育，生涯学習の時代だと言われるが，何はともあれ，いろいろな生涯発達論がありうるだろう。人間の生涯は，個人の内的状況や社会・文化の外的条件によって明らかに異なり，非常にバラエティーがあるから，その途の専門家に任せず，素直に多様な生涯発達論を提出してみる価値があるように思う。こう考えて，踏み込んだことのない異領域ながら，普段考えていることを敢えて一つの生涯発達論として試みた次第である。

討論論文１．

生涯発達論と教育

東京学芸大学教育学部　**斉藤耕二**

I　生涯発達研究への二つのアプローチ

生命の始まりから，その終である死に至までの生涯の間に生じる身体・精神的変化を取り上げて，考察の対象とする試みは学問の誕生にさかのぼることのできる永い歴史を持っている。Reinert, G.（1979）は，生涯発達心理学形成の準備期間の始まりを遠くギリシャ時代に求めている。しかしながら，この時代の先駆的な考察は思弁的なものにとどまるので，実証的データを基礎とした真に科学的研究と呼べるものに限ると，その起源を，1969年から1972年にかけてWest Virginia大学で開催された「生涯発達心理学」を主題とするカンファレンスの成果が，Baltes, P. B., Schaie, K. W.（1973）あるいはNesselroade, J. R., Reese, H. W.（1973）などによってまとめられて刊行された1970年代初頭からそれに先立つ60年代に見出すことになる。この生涯発達心理学の出現から現在までわずか20年余を経過しているに過ぎないにもかかわらず，このように短い期間のうちに，生涯発達的視点や生涯発達的アプローチが発達の心理学的研究において特に強調され，重視される位置を占めるようになった背景には，発達

心理学自体の発展と並んで急激な社会情勢の変化がある。

Annual Review of Psychologyに「生涯発達心理学」が初めて登場したのは1980年のことであった(Baltes, P., Reese, H. W., Lipsitt, L. P. 1980)。この論文では実証的研究の実例として記憶と知能測定が取り上げられてはいるが，主な目的は生涯発達心理学それ自体の学問的基礎や独自性を明確にすることに置かれている。このことは新たに開拓された領域としてその独自性を強調する必要が存在したことを示している。しかし，1984年のレビュー論文ではタイトル自体も「生涯発達」となっており，内容の中心は実証的研究の展望に当てられている（Honzik, M. P. 1984)。この展望の筆者であるHonzikによると，児童心理学が大学の講義として登場したのは1920年代末であって，最初のテスキトはJersild, A. T.（1933）を待たなければならなかったそうである。これらのことから明らかなように，精神発達の研究が児童心理学から発達心理学へ，そしてさらに生涯発達心理学へと急激に変化してきたことが分かる。

こうした発達研究の系譜を眺めるとき，かっては心理学の独壇場と言ってもよい様相であったこの領域に社会学を基礎とする新しいアプローチが登場してきている。ライフコース・パースペクティブ，あるいはライスコース・ダイナミックスとよばれているこの領域は家族とエイジングについての社会学的研究の発展として，心理学，人類学などとの学際的交流から生まれたとされている。この領域での代表的研究者であるElder, G. H. Jr.（1985）はライフコースを次のように定義している。「ライフコースは，年齢によって区分されている生涯（life span）を通うしての経路（pathways）であって，それは生活のなかでの出来事（events）のタイミング，持続，配置，順序における社会的なパターンにいたるものである。そしてこの出来事のタイミングは出来事が起きるかどうかということや変化のタイプ，程度と並んで生活経験にとって重要である。(P17)」これに付加えて，ライフコース研究の中核となる主題として，軌跡（trajectory）と移行（transition）の二つの概念を挙げている。移行がある状態から他の状態への変化を指しているのにたいして，軌跡はある時期での状態とそれに引き続く時期の状態の間の結びつきを意味している。これらの概念はいずれも個人の生涯のうちに生じてくる変化と関連しており，人生での出来事（life event）を契機として現われることが強調されている。

ライフコース研究においてもさまざまな理論，立場が存在しているので，Elderの理論のみを代表的，もしくは典型的と見ることには異論が生じるかもしれない。しかし，コースという概念によって示唆されているように，移動の経路や変化の方向性に焦点が置かれていることを指摘することができる。

「受精から死に至る人間のライフコースのなかでの発達的過程の記述，説明，変容（最適化)」(Baltes, Reese & Lipsit 1980）を目的とする生涯発達心理学では，ライフスパンということばに暗示されるように，発達的変化が生じる期間の広がりに強調が置かれている。ここには，生涯の始まりを占めている，成人になる前の期間に限って発達を考えた，かっての発達観に対する反動が反映していると解釈することもできるであろう。行動の変化，あるいはその背後にある内的構造の変化として発達を研究対象とするのであるから，観察の時点間の間隔はデータの性質を規定する要素として含まれることになる。生涯発達というときにはこの観察期間が広がり，長期的なシーケンスを含むことと全生涯との関連づけが問題となる。

生涯発達心理学では，全生涯を通うしての発達理論を作りあげることよりはむしろ一つのオリエンテーション，視点であることがしばしば強調されている。このことはこのシンポジュームでの高橋論文(1991）でも指摘されている。すなわち，特定の発達段階や短い期間での変化を対象とした研究であっても，そこに長期的な発達やいくつかの発達段階にまたがる変化への関連づけと生涯に対する展望が含まれているならば生涯発達研究としての意義が認められることになる。

ここで，ライフコース研究と生涯発達的研究の印象によるラフな比較を試みると，Elder論文に見られるように前者では比較的マクロな変数によって変化が記録されており，方向性自体の変化を生み出す転機（turnning point）の機能の分析に焦点が向けられている。そしてこうした契機となる社会的条件

の役割（例えば兵役経験）が明らかにされている。

対照的に，高橋論文では人生のすべての期間にわたって変化の豊かな可能性が存在することが指摘されているが，生涯にわたる対人関係の発達のモデルとして提示されている「愛情構造」は，幼児から高齢者に及ぶ発達段階を通うして一貫している，安定したものであるとされている。

発達の過程において，心理的特性がどのようにして形成され，それがどのくらいの期間一貫して持続し，変化に対する抵抗を示すのか，あるいはこのような安定性や変化に関連した要因の作用を明らかにすることは，対照的な二つの生涯研究を結びつけ，統合への可能性を開くことになる。

Ⅱ　発達における可塑性

生涯の初期における不利な環境条件の影響のもとで形成された心理的特性や機能が後の段階において変化し，改善されうるものであるならば，意図的な介入や教育への道が開かれることになる。このような変化の可能性を指す概念として「可塑性（plasticity)」,「回復力（resilience)」という用語が用いられている。

初期発達を生涯発達的視点から検討したThompson, R. A.（1988）は，初期発達を生涯発達に結びつけるかぎとなる概念の一つとして，この発達的可塑性（developmental plasticity）を挙げている。変化の可能性を意味するこの発達における可塑性は，個体の発達の過程において生じうる変化の可能な範囲として定義されている。そして個体の側のこの可塑性と環境条件の相互作用の所産が行動の変化として顕在化されることになる。生涯を通うしての発達という時には必然的に発達のいかなる段階においても常に可塑性が存在することが前提となる。

通常，幼児と母親の間に形成される情緒的な結びつきである愛着（attachment）は，対人関係を形成して維持してゆく能力――関係的コンピネンス（relational competence）と呼ばれることもある――を形成する出発点と考えられている。幼児期における愛着によって社会関係の基礎となる能力が十分に形成されないと，それが原因となって後の段階において対人関係の形成，維持，発展の困難や失敗が生じてくるとされている。

このような対人関係の発達における初期経験と後の段階での行動との直接的な結びつきを検討するために，Skolnick, A.（1986）は幼児期から成人期への対人関係の変化を観察している。幼児期，児童期，青年期，成人期の4発達段階での対人関係の測定（幼児のときの愛着の安全性，児童期の仲間関係，青年期の仲間関係，成人期での心理的健康度，結婚満足度，社交性など）して，その結果に，Runyan, W. M.（1980）がライフコースのタイプを見つけ出すために開発したStage－State Analysisを適用している。発達段階

第1表　発達の型（developmental pathways）と成人期総合得点

発達の型		成人期総合得点 全体	男	女
path 1	－ － － －	10	8	2
path 2	－ － － ＋	2	1	1
path 3	－ － ＋ －	1	0	1
path 4	－ － ＋ ＋	2	1	1
path 5	－ ＋ － ＋	2	2	0
path 6	－ ＋ － ＋	1	1	0
path 7	－ ＋ ＋ －	4	3	1
path 8	－ ＋ ＋ ＋	9	5	4
path 9	＋ － － －	5	2	3
path 10	＋ － － ＋	5	0	5
path 11	＋ － ＋ －	3	0	3
path 12	＋ － ＋ ＋	3	3	0
path 13	＋ ＋ － －	4	1	3
path 14	＋ ＋ － ＋	0	0	0
path 15	＋ ＋ ＋ －	4	1	3
path 16	＋ ＋ ＋ ＋	7	2	5
被験者数		62	30	32

（Skolnick, A. 1986　Table Ⅱ, Ⅲ, p191およびp192より作成）

（4段階）と各発達段階での状態（メディアンで分割した良好―不良の2水準）を組み合わせた16の型（pathway）と成人期での対人関係のさまざまな指標間の関係を示している。第1表は発達の型と成人期の総合得点（結婚満足度，社交性，心理的健康度の得点合計）の組み合わせた頻度を示している。

幼児期の母親に対する愛着が後の段階での対人関係の原形となるという愛着理論の前提が正しいとすると，完全な一貫性であるpath 1とpath 16の頻度は著しく高いことになる。この結果ではその比率は27パーセントにすぎないし，幼児期の愛着が不良であったにもかかわらず成人期に良好なものが55パーセント（31人の中で17人）を占めている。また，path 8やpath 9のような逆転の比率も23パーセントと高い。このように愛着の安全性と後の段階の対人関係の相関関係がきわめて低いことは発達的可塑性が児童期，青年期，成人期を通じて常に高く，変化の可能性が大きいことを示唆している。

被験者の数がすくないため，一般化することは難しいが，path 1とpath16に特に強く現われているように，かなりの程度の性差が存在している。また愛着が不良であった頻度が男性では70パーセントであるのに女性では31パーセントに留まっている。このことは同じような可塑性に恵まれていても，変化を受けやすい方向性に性による差があることを示しているのかもしれない。

対人関係の発達についてはいくつかのモデルが既に提示されている（Takahashi, K.1990）。この研究で用いられたような分析法では可塑性や変化が生じた時期を明らかにすることができても，その変化を規定している要因の分析を進めることは困難となる。こうした場面では，interaction modelでのように，個人変数と状況要因をそれぞれ説明変数としたモデルが効果的なのかもしれない。Elderが転機の概念を用いて提案しているように，時期と状況を組み合わせた変数による分析が有効である可能性も考えられる。

生涯発達心理学とライフコース研究という，人間の生涯を共通な研究対象とする二つのアプローチを統合することによって，これまで心理学者が取り上げることの少なかった文化・歴史的文脈と個体発達を関連づけて，理論化する道が開かれてくるのではないかと期待される。

引 用 文 献

Baltes, P. B. and Schaie, K. W. (Eds.) 1973 Life-span developmental psychology : Personality and socialization. Academic Press.

Baltes, P. B., Reese, H. W. and Lipsitt, L. P. 1980 Life-span developmental psychology, Annual Review of Psychology, 31, 65-110.

Elder, G. H. Jr. 1985 Perspectives on the life course. In Glen H. Elder,Jr. ed. Life course dynamics : Trajectories and transitions. Cornell University Press.

Honzik, M. P. 1984 Life-span development. Annual Review of Psychology, 35, 309-331.

Nesselroade, J. R. and Reese, H. W. (Eds.) 1973 Life-span developmental psychology : Methodlogical issues. Academic Press.

Runyan, W. M. 1980 A stage-state analysis of life course. Journal of Personality and Social Psychology, 38. 951-962.

Skolnick, A. 1986 Early attachment and personal relationships across the life course. Life-span Development and Behavior, 7, 173-206.

Takahashi, K. 1990 Affective relationships and their lifelong development. Life-span Development and Behavior, 10, 1-27.

Thompson, R. A. 1988 Eary development in life-span perspective. Life-span Development and Behavior, 9, 129-172.